

南方熊楠記念館

この博物館は和歌山県生まれの植物学者、南方熊楠（1867～1941）の生涯を記録しています。環境保護、粘菌についての専門性、型にはまらない学習方法で南方は人々の記憶に残っています。学校を退学したにもかかわらず、熊楠は人生を徹底的な研究に捧げ、植物学や民俗学、哲学、語学、人類学の専門家になりました。新種の粘菌をいくつか発見し、熊野の山中で標本を収集しました。

1906年に明治政府は神社合祀政策を発令しました。国中の神社を整理し管理する取り組みの一環として、神社の数を減らすためのものです。熊楠は神社が閉鎖するとその周りの深い森が危険にさらされることを知っていました。彼は政策に反対する運動をして、世論を動かすことに寄与し、最終的にはいくつかの森を救いました。南方は粘菌の標本を14年間にわたって、アメリカ、キューバ、イギリスで収集し、イギリスでは大英博物館を毎日のように訪れて標本を調査したり本を書き写したりしました。海外では彼は何人かの有名なヨーロッパの科学者や、中国の革命家で中華民国の初代大総統である孫文（1866～1925）と友人になりました。日本に戻ってからも彼が人生を捧げたのは、和歌山で標本を収集することでした。彼のキャリアの最盛期は、熱心な植物学者である昭和天皇（1901～1989）に粘菌について進講するよう命じられたときのことでした。